

♡「先生」からのラブレター③

2020.2.3

もう二十年も前のことであろうか。教え子から手紙が届いた。「看護師になった。横浜市内の病院で働いている」 私は病院を訪れ、就職の祝いとはげましを伝えようと思った。

病院を訪れ、勤務する階のナースステーションの前に立った。そしてこう言った。

「Aさんはいらっしゃいますか？」

だが、対応した看護師は、その私の第一声への返答はなく、こう切り返してきた。

「どんなご用件でしょうか？」

その看護師の表情も硬かった。まるで尋問されているようであった。

私の答えは「お会いしたい」しかなく、どう説明すればいいのか戸惑った。

すると、別の年配の看護師が出てきた。ネームプレートに看護師長とあった。責任者が出てきた。そして、表情は硬い、怖い。私は悟った。「私は不審者、クレーマー、ストーカーと思われる」

その階は産科。産科には似つかわしくない年齢の男、見舞客ではない、入院の家族でもない、看護師を特定して会いたいと言う男…防御を固めるのは仕方ないことである。

私は素性を明かすことにした。「私はAさんの小学校の時の担任でした…」

この「小学校の担任」という言葉で、その場の雰囲気は急変した。

看護師長は「まあまあ、それはそれは、先生でしたか。先生、どうぞどうぞこちらへ」と、満面の笑み、ナースステーションの雰囲気は一変した。看護師長は説明してくれた。「Aは今日夜勤明けでお休みで…」 十秒前の警戒モードはどこへその、和気あいあいの笑顔モードへと急変した。

私はこう思った。「《小学校の先生》は顔が利く」 《小学校の先生》、この見えない名刺は効果絶大である。ナースステーション、看護師長は…すなわち、社会は《小学校の先生》に特別の好感情、リスペクトを抱いている。

(この頁続く)